

日本のスポーツのグローバル化

福岡県立鞍手高等学校

吉田 健真 岡村 滉大 栗田 和 井ノ上 健吾 永井 颯一郎
指導教員 山口 恵

1. テーマ設定の理由

2019年は日本でラグビーのワールドカップが開催され、日本代表がベスト8進出を達成した。それ以前の1995年の第3回ワールドカップでは、ニュージーランドに17対145と大敗している。そこから日本ラグビーの改革が始まり、海外からコーチを呼び寄せ、当時3つに分かれていた社会人リーグを統一してジャパントップリーグを開幕させた。

ラグビーはおもにフォワードとバックスに分かれている。フォワードは体格が大きくパワーが必要。バックスはテクニックが必要で、スキル向上が必要だ。

日本のスポーツは体格では海外の選手には劣るが、技術や戦術を磨くことで海外のスポーツに対抗することが可能である。日本ではラグビーがベスト8になったということ、また来年には東京オリンピックが開催されるということで、スポーツに対する熱気が高まっている。そこで私たちは、なぜ日本は小柄な体型にもかかわらず、ラグビーという他のスポーツに比べて最も体格が重要なスポーツでベスト8になることができたのか疑問に感じた。実際にラグビーは強化が成功し成果を上げている。また、世界との体格差を埋めるためにどのような工夫をしたのか、その方法は何なのかを調査し、ボールをゴールまでもっていくことが似ているサッカーに注目し検証することにした。

2. 仮説

私たちは日本のスポーツ選手と海外のスポーツ選手の体格の違いに着目した。先日日本で行われたラグビーワールドカップで日本はベスト8という快挙を達成した。日本の平均身長は183センチ、平均体重は100キロに対してアイルランドの平均身長は187センチ、平均体重は103キロであった。両者の戦いは体格では劣る日本が前評判を覆して勝利した。なぜ日本は勝つことができたのか。勝因を調べ、他のスポーツに活かすことはできないか考えた。

実際に調べてみると、世界と同じことをしても日本は勝てないのだという。そこでコーチが改善点として目をつけたのが日本人らしい勤勉さ、責任感、体格の小ささだ。ポイントは大きく3つ。『スクラム』『世界進出』『指導者』である。以下の表はサッカーとラグビーのワールドカップの戦績。そして、ラグビーワールドカップで今回日本が対戦した国の体格比較である。

サッカーワールドカップ戦績

ワールドカップ年	監督	結果
1998・フランス	岡田武史	グループリーグ敗退
2002・日本	トルシエ	ベスト16
2006・ドイツ	ジーコ	グループリーグ敗退
2010・南アフリカ	岡田武史	ベスト16
2014・ブラジル	ザッケローニ	グループリーグ敗退
2018・ロシア	西野朗	ベスト16

ラグビーのワールドカップ戦績

ワールドカップ年代・開催国	ヘッドコーチ	結果
1999・ウェールズ	平尾誠二	グループリーグ敗退
2003・オーストラリア	向井昭吾	グループリーグ敗退
2007・フランス	ジョン・カーワン	グループリーグ敗退
2011・ニュージーランド	ジョン・カーワン	グループリーグ敗退
2015・イングランド	エディ・ジョーンズ	グループリーグ敗退
2019・日本	ジェイミー・ジョセフ	ベスト8

今回日本が対戦した国の平均身長と平均体重

国	平均身長	平均体重
日本	183, 5 cm	102, 1 kg
南アフリカ	186 cm	103 kg
アイルランド	186 cm	104 kg
サモア	186 cm	106 kg
スコットランド	187 cm	103 kg

この表から見ても、戦績は予選敗退が多く体格差も大きいことがわかる。ポイントの一つ目の『スクラム』では日本人らしい勤勉さを活かし長谷川コーチの細かい指導が行われ、強化に成功した。二つ目『世界進出』では日本のサンウルブズがスーパーラグビーという国際大会に参加するようになったことで日本の選手たちが国内では体験できないレベルの高いチームでプレーすることができた。今までなかった技術をたくさん学び、そのチームの選手たちがレベルアップしたことが、今回のワールドカップにつながったのだ。三つ目『指導者』国内トップリーグのチームの監督に世界的に有名な外国人の監督が就任し、今回活躍した福岡選手や姫野選手を成長させた。

3. 提 案

私たちはラグビーというボールをゴールまで持って行く競技に似ているサッカーに注目した。その中でも男子サッカーは世界と比べてレベルが低い。そこで男子サッカーにラグビーの指導方法を取り入れることを提案する。サッカー日本代表の選手一人ひとりが、海外のチームに行き高いレベルの中で試合をし、経験することで日本代表のレベルが向上すると考える。そしてラグビー日本代表がスクラムを強化したようにサッカー日本代表も組織的に戦術をつくりたたかうことを提案する。一人ひとりのフィジカルや個性で劣る日本は全員で協力して戦えたら強くなるのではないかと考える。最後に海外の指導者だ。世界のレベルを知る海外指導者を取り入れることで最新のトレーニングなどで鍛えられる。以上この3つを提案する。

そこで私たちは、提案で挙げた3つの方法をサッカーに導入したとして検証を行った。

1、海外で高いレベルにあるチームと試合を行うという方法。これを行う最大の利点としては海外のスポーツ選手に対する恐怖などの軽減である。日本の選手と体格差のある海外の選手と試合をし、そこで国内では出来ない経験を積み重ね、自信をつけ、海外の選手にも屈しない精神力を養えるのではないかと考える。さらに、海外では通常とは違う生活を強いられる。そのため、その中でいかにいつものパフォーマンスができるかなどの力も身につく。

2、日本にあう戦術を取り入れるという方法。例として、ラグビーの日本代表が実行したスクラムの改善が挙げられる。先日行われたラグビーのワールドカップで日本は世界8位になるという歴史的快挙を成し遂げた。その勝因の1つは背中や足の位置を細かい点を改善し、長年の弱点だったスクラムの強化の成功であった。このことからサッカーは日本の体格の小柄な特徴を生かして、縦に速いオフェンスやプレスディフェンスを入れることによって、海外との体格差を埋められるのではないかと考えた。実際にハリルホジッチ監督がオーストラリア戦やサウジアラビア戦で施策した戦術は熟成を見せていた。

3、海外の指導者を監督やアシスタントコーチになってもらう。実際に今の日本でも数多くの海外指導者がプロのチームに赴任している。そして、その世界レベルを知っている、または経験している海外指導者に技術・戦術を教えることで、プレーの幅が広がり、選手の飛躍的な成長が期待できると考えられる。特に、サッカー日本代表監督初の外国人監督のハンス・オフト監督は日本のサッカーの土台を作り、当時の日本のサッカーを大きく進歩するのに貢献したと言える。

4. 結 論

私たちが導入を提案した3つの方法は、サッカー選手の身体面と精神面を鍛えることが可能である。海外でプレーすることによって普段とは違う生活を強いられる。このことによって臨機応変に対応する能力や普段とは異なった環境に瞬時に対応する能力が身につく。戦術を取り入れることから、個人では世界の選手にはかなわないことをチーム全員で協力して補うことが可能になる。そして、協力することにチーム内で信頼や絆が生まれプレーの向上が見込まれる。

海外の指導者に教わることで技術が向上し、戦術の面でも今までできなかった戦術を取り入れることが可能になり海外で戦うすべを獲得できる。したがって、日本のサッカーは従来よりも強く海外で活躍することが可能である。

3つの方法は、これから日本がスポーツで海外と渡り合っていくためには必要なことである。そしてサッカーだけでなくほかのスポーツにも必要なことであり、この導入によって日本のスポーツは海外で渡り合っていけると考えた。

5. 今後の課題

今後の課題は、まず海外で試合をすることは、日本で試合をするよりもコストがかかることがあげられる。あと、海外のチームと試合をする事は簡単なことではなく、試合をするには、海外で行われているカップ戦に積極的に参加する必要がある。そのためには、ある程度日本のサッカーが海外で認知されていないと実現することは難しいと考えられる。戦術の面では、戦術を考えてから実際にその戦術を活用するまでの過程で時間が必要になることがあげられる。

最後に海外の指導者に教わるには、海外で試合をするのと同様にコストがかかってくる。それから、日本の選手のプレースタイルが海外に染まってしまい日本らしさがなくなってしまうことが考えられる。これらの課題をなくすために今後も研究を進めていきたい。